

「平和とは」100人の回答

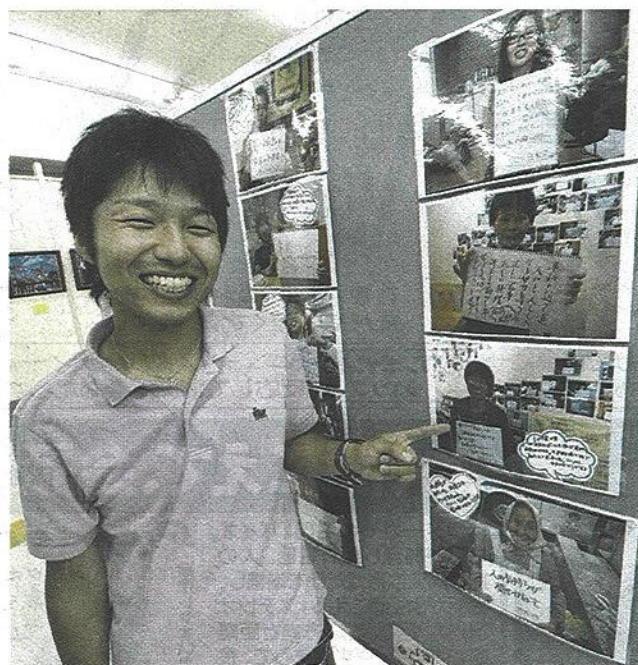
上越の学生

写真展で紹介

「あなたにとって平和とは何ですか」。長岡高専専攻科2年の大嶋義章さん(21)(上越市)は6月、福岡県八女市で今も燃え続ける「広島原爆の残り火」を北海道へヒッチハイクで運びながら、出会った人に「平和」について尋ねる旅をした。回答をスケッチブックに書いた約100人を紹介する大嶋さんの写真展が、長岡市大手通の市民センター

1で19日まで開かれている。

残り火は、八女市星野村の男性(故人)が投下後の焼け跡から持ち帰って保存してきた。ろうそくにともして、犠牲者の冥福と平和を祈る「キャンドルナイト」が全国に広がり、新潟市でも6月20日夜に実施された。大嶋さんは、火を札幌市に届けるボランティアとして参加する際、「平和」



「平和」について回答した人たちの写真と撮影した大嶋さん(長岡市の市民センターで)

九州から北海道まで ヒッチハイクで撮影

を聞くアイデアを思いついた。

5月末に自宅を出発し、福岡で火を受け取り北海道へ計2週間の行程。わずかな現金とリュックサック、スケッチブックを持ち、高速道路のサービスエリアのいすで寝るなどしながら、出会った人に趣旨を話すと、火を保存するランプ用の灯油をくれたり、食事を出してくれたりと、多くの人から支援を受けた。

質問に答えたのは、幼児から90歳代まで幅広く、ほとんどが笑顔で撮影に応じてくれた。「平和」のとなえ方は、「一日三食」「金」「娘(子供)」といった具体的なものから、「当たり前」の明日がふつうにあること、「笑顔がある場所」など様々。北海道被爆者協会の男性は「空気がいいなもの。その中にいてもありがたいと思っていな。なければおしまい」と記した。大嶋さん自身は「これからも考え続けて、生きていく間にその答えが見つかったらラッキーなもの」と記し、「旅先で多くの人に出会い、助けられたことが、生きていく上で宝物になった」と振り返る。